

会 報

今秋10月2日開催の第15回日本歯科医史学会総会ならびに学術大会は、東京歯科大学金竹哲也学長会長のもとで、長谷川正康教授が準備委員長をつとめられ、学会当日発表演題を6月30日〆切りで募集中のところ、従来になく沢山の出題があり、1日会期の演題では消化しきれない程といううれしい悩みが生じた有様で近日中、学会責任者が打ち合せを行ない“プログラム”を作成の予定である。1日の会期で消化しきれない程沢山の研究業績が発表されるまで本会が成長発展したことは、まことに斯学のためによるこぼしい次第といえる。

◇例会◇

3月例会（第174回）

会場：モリタホール

日時：62年3月20日（金）

1）中国における口腔科の現況について

長谷川正康

2）高橋富士松小伝について

新藤 恵久

本間 邦則

4月例会（例年通り休会）

5月例会（第175回）

会場：モリタホール

日時：62年5月15日（金）

1）「ゲーテと友人の医師たち」

本間 邦則

2）医科歯科器械カタログの移り変わり

谷津 三雄

6月例会（第176回）

会場：モリタホール

日時：62年6月19日（金）

1）歯学の教授科目の分化、発展とその統合に 関する医史学的研究（その1）—私見—

森山 徳長

2）新潟の外国人医学教師について

本間 邦則

◇朗報◇

本学会発足以前の歯学史研究会創立時より発起人の一人となり、今日に至るまで、理事として日本歯科医史学会の発展にご協力いただいている、名誉会員、東京歯科大学名誉教授高木圭二郎先生が多年に渉る歯学教育、厚生事業関係にご尽力されたのが実を結び、今春の定例叙

勲で、勲3等旭日中綬章授章の栄光を受けられましたことをお知らせ致します。今日の学会の会則は、先生のご立案に依って規定され、実施しているものであることをつけ加えておきます。

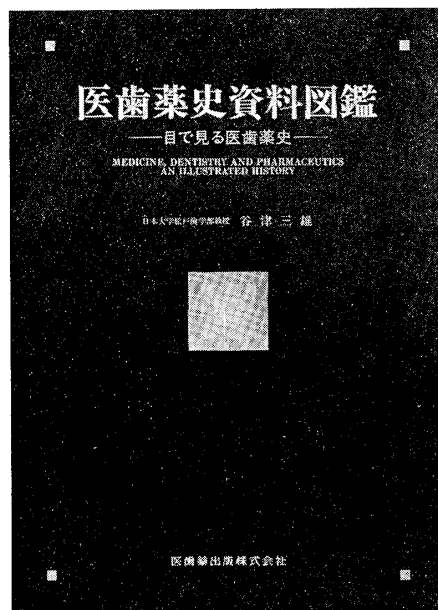
◇訃報◇

本学会創設以来関西地区で学会のためご尽力いただきました、評議員山上秀治先生には、去る5月9日に奈良市吉田病院で心筋梗塞のため逝去されました。故人は万葉集、歴史、写真、切手等に対する多趣味の方でしたがまことに残念です。茲に心から哀悼の意を表ささせていただきます。

——書評——

医歯薬史資料図鑑 一目で見る医歯薬史—

谷津三雄著



A4判・362頁

定価 28,000円 円400

医歯薬出版株式会社

著者谷津三雄教授については、今さら贅言を要しない。

医学史家としてのプロフィールに限れば、日本歯科医史学会の創設メンバーの一人であり、現在、理事長代行として文字通り同会の支柱となっている。医学史に対する情熱と献身は、人後に落ちない。

歴史なくして学問はない。それにもかかわらず、とか

く世人は医学史学を、ヒマ人の趣味や隠居の仕事と軽んずる嫌いがある。そうした浅慮浅見に対し、著者は本書の扉に先人R. ウィルヒョウの名言『医学は、どんな自然科学よりも、歴史上の知識を必要とする』を掲げて、警醒をうながしている。その巧みな示唆に、快哉を叫ばずにはいられない。

前書「歯学史資料図鑑」から7年、その範囲を医学史、薬学史までひろげた本書は、A4判362ページ、図579枚におよぶ大著となっている。

ページを繰ると、著者の収集したおびただしい資料が、まるで絵巻物をひろげるように、次々と目の前に華麗に展開されていく。看板、薬器具、眼鏡、お歯黒、薬袋、売薬、印籠、双六、引札、巻軸、ラベル、錦絵、麻

疹絵、楊柄、鍼、歯科器械、医療器材、医療広告、戦画、切手、医歯薬神仏等々。

本来、その時代に生きなければ、見ることはなかったであろう貴重な資料ばかりである。一つ一つの資料には、著者の執念と愛着が色濃く染みついているように思われる。

各章ごとに考証を経た簡潔な解説が添えられ、図の理解を深めて、読史（歴史の書を読むこと）の楽しさ、面白さ、懐かしさ、驚きを満喫させられる。読者は居ながらにして、悠久の医歯薬史の世界に引きこまれていく。

歯科医師の愛蔵書として、歯科医院の書架に飾られるべき玉著である。

（日本歯科大学新潟歯学部 中原 泉）

『医歯薬史資料図鑑——目で見える医歯薬史』

（谷津三雄著）を読んで

著者は日本大学松戸歯学部教授であり、専門は麻酔学と医学・歯学史である。また、医歯薬関係資料の蒐集家としても名高い。日大松戸歯学部資料室のコレクションは著者が中心となって集められたものと聞く。本書は著者のコレクションと大学資料室所蔵のものを主体に載せた図録である。著者は昭和55年に『歯学史資料図鑑——目で見える歯学史』を出版しているが、本書はその姉妹編というべきものである。しかし、前作に比べて本書の図版は美しい。この種の図鑑では最高のできである。図録は内容が大事なことはいうまでもないが、それ以上に絵が明瞭であることがその本の価値を左右する。その点からもこの本は期待を裏切らない。

本書では医療にかかわる看板、引札、浮世絵、錦絵、製薬、調剤の道具、薬袋、印籠と根付、神仏などの絵、および歯学にかかわる切手、入れ歯など、江戸時代から昭和初期に及ぶ範囲の資料が形状別に分類され、簡潔な解説がつけられている。つまり、本書は実用図鑑として役立つものにしたいという著者の意図から、資料を医・歯・薬の用途別に分けることをあえてとらなかったという。それは庶民のなかの医療を示そうとした本書の目的にあったものである。しかし、解説を少なくおさえた手前、看板や引札など、同一のテーマでは、資料が時代順に並べてあれば、その資料のもつ意味を読者はいっそうよくわかるだろうと惜しまれる。たとえば「ちの道」

「痢びょう」といった江戸時代にどこでもみられた病名やオランダ語をもじった薬名などが、時代がくだるにつれて消えてくることがわかるであろう。また、“御免”、“官許”、“商標登録”といった言葉が、いつ、どうしてでてきたのか制度や商業の変遷とあわせて知ることができればありがたいと思った。

この本をみていて、広告というものが時代感覚をもっとも先端的に、鋭敏に表していることをあらためて感じさせられた。つまり、後世になってからも、過去の時代の感覚、流行を知るうえで広告は高い価値をもつものである。たとえば神経という言葉のように、1774年に「解体新書」のなかで造語された言葉が、巷間で人の口の端にのるようになるのは、明治に入ってからである。その時代になると看板に「神経衰弱」「脳病」などの文字が現れ、多用されたのだった。

本書に収載されているものに珍品がいくつもある。薬籠、すなわち、診療カバンもそのひとつであるが、これを見てみると、医学の進歩が医療形態をずいぶん変えてきたこと、それもここ数十年の間に根本的に変えてしまったことをつくづくと感じさせられた。

しかし、印籠や根付など江戸文化の本質を具現したような工芸品をみてみると、日本文化の本質は変わらないこと、一時流行した「縮みの文化」という言葉を実感をもって理解できる。

このように、本書の頁をくついでいくうちにいつしか展覧会場をひとり静かにまわり、一つ一つの品物を眺め、感慨にふけっていく気分になるのである。

（順天堂大学医学部医史学、酒井シヅ）